

古城十忍の

お触れ書き



#19 パラサイトパラダイス

あなたは「パラサイト族」ではないですか？
ライトなコメディタッチで描く、「共依存家族」。

「パラサイト・シングル」という言葉が初めて世に出たのは1997年、今から20年近くも前のことです。

言葉の生みの親は、東京学芸大学教授の山田昌弘氏。社会現象にもなったこの言葉をキーワードに、氏は当時の社会状況を読み解く『パラサイト・シングルの時代』（ちくま新書）という本も99年に出版しています。

パラサイト・シングルとは簡潔に言えば、「学卒後も親と同居してリッチに生活する未婚者」のことですが、言葉が世に出てから10年後の2007年に、その山田氏自身がこう言っています。

「だが近年、若者の雇用が不安定化し、また、かつてのパラサイト・シングルも30歳代になり、将来に不安を感じる人が増えている。親同居未婚者が必ずしも経済的に恵まれているわけではなく、パラサイト・シングル現象にも陰りが見えている」（『知恵蔵2015』解説）

そして今、2016年。

2007年に「陰りが見えていた」パラサイト・シングル現象はこの10年近くでどう変化したのでしょうか。増えたのか、減ったのか、はたまた変わらないのか。

これに関してはデータがないので明確なことはわかりませんが、私の実感としては「そんなに変わっていないんじゃないの」と推察します。

いえいえ、もっと言うなら、パラサイトしてきたのは何も若者だけに限ら

ないんじゃないの、とも思います。

時は移れども、未婚も既婚も、老いも若きも、人は絶えず誰かに、何かに、パラサイトするし、しているし、し続ける。つまり自覚的にしろ、無自覚的にしろ、人は何かに、誰かに、パラサイト(=依存)する。それはもう、人間の一つの本能なんじゃないの、と。

ではいったい人は誰に、何にパラサイトするのか？

誰、ということ言えば、これはもう間違いなく山田氏の指摘通りに、筆頭に挙げられるのは「家族」なのだと思います。恐らく、家族、恋人、親友、先輩後輩……と、親しければ親しいほどパラサイトしやすいのでしょう。

何に、ということ言えば、これはもう切りがありません。端的な例を挙げれば、「スマホがなくなったら私、生きていけない」と、割と本気で思っている人は決して少なくないと思います。(私もたぶん途方に暮れます)

特に日本人は、未だに「右へならえ精神」が根っこにしつこいほどにはびこっている国民のように私には思えますし、しれっとした顔で「前例がありませんので」だの、「ほかにポテトはいかがでしょうか」だのと事務的に言える精神も、恐らくは何かにパラサイトしている証拠のように私には映るのです。

まあ、少々、風呂敷を広げすぎましたが、『パラサイトパラダイス』の初演は2003年。あのパラサイトし合う家族の姿は今の人たちの目にどのように映るのか。そんなのはもう古くて遠い大昔のことだよと鼻で笑ってすませられるのか。いや、そもそも、パラサイトするのが人間の本能だとしたら、それはいけないことなのか。そのことを私自身、今一度確かめたくて、実に13年ぶりの再々演に臨むことにしました。

でもって今回、なんと、アフターイベントの「スペシャル対談」には、「パラサイト・シングル」という言葉を生んだ山田昌弘さんをゲストに迎えます(7月1日)。一日限りではありますが、「パラサイト・シングルのその後」と題したトークでいったいどんな話が飛び出すのか、山田さんが今の社会をどう解き明かしてくれるのか、どうぞこちらも楽しみにしてください。

俳優陣も初演から同じ役を続ける奥村洋治(父)、関谷美香子(母)、山下夕佳(祖母)に加えて、スーパー・エキセントリック・シアターの永田耕一さんも初演と同じ隣のオジサン役で再登場(情けない、だらしない役をやらせたら天下一品)。加えて、一昨年の『海のとっぺん』で主役を

務めた町田慎吾も娘の恋人役で再びワンツーワークスワールドに参加、きつと新たな魅力をふりまいてくれることでしょう。さらに、『奇妙旅行』以来となる重藤良紹(祖父)、初参加となるフレッシュさに満ち満ちた若手の北澤小枝子(娘)、永澤洋(息子)。これ以上ないパラサイト・チームができあがりそうな面々です。

『パラサイトパラダイス』はコメディですが、同時に最初からフィジカルを非常に重視してつくりあげた作品でもありますので、各場面で身体を駆使した演劇的表現が、これでもか、恐れ入ったか、というほどに登場します。(こんな大口を叩いていいのか?)

それに、ようやく認知度が上がってきたワンツーワークスお得意のムーヴメント。これも『パラサイトパラダイス』では一つの到達点を見せていて、必見ものです。もちろん今回はさらにグレードアップしてお届けすることになりますから、今から早々に観劇日をスケジュールに入れちゃってください。先行予約は5月8日(日)です。

絶対に、見て損はないと思いますぜ。

(と、敢えて大口を叩いたまま、劇場でお待ちします)

2016年4月10日

古城十忍の

お触れ書き



#18 死に顔ピース

笑顔で看取る。笑顔で「死」に立ち向かう。
笑えて泣けて心にぐっとくる、王道ヒューマンドラマ。

『死に顔ピース』の初演は2011年11月。その後、地方では何度か上演していますが、東京では今回、4年ぶりの再演になります。

思い起こせばこの企画はそもそも、ある「お葬式」がきっかけでした。

劇団青年座の名優・Mさんがお亡くなりになって、生前何かとお世話になっていた私は、失意のまま葬儀に出かけたのです。残念ながら死に顔は拝見できませんでしたが、涼しげなお顔で写っているMさんの遺影を前にすると、不覚にも泣きそうになって慌てました。

その斎場で知り合いの女優・Sさんに会い、Mさんと共演したこともある彼女は、やはり私と同じような沈鬱な表情を浮かべて、「私、古城さんにどうしてもやってほしい企画があるんです」、そう言ったのです。

葬儀の帰り、お昼でも食べませんかという流れになって確か蕎麦屋に一緒に入り、そこでSさんは企画の話を始めたのですが、その発端はフジテレビのニュース番組での特集で、不思議なことにその特集は私もまたまた見ていて、しかも鮮明に覚えていたのです。

鮮明に覚えていたのは番組で紹介された一枚の記念写真があまりにも衝撃的だったからです。

写真には3人の女性が写っていました。

一人は自宅の布団に寝かされている、まだ40代の女性で、その人は自宅療養の果てに末期癌で亡くなったということでしたが、抗がん剤で顔全体がぱんぱんに腫れあがったその頭にはなぜか、猿のかぶり物が

すっぽり被せられていました。あとの二人はまだ中・高生と思われるその娘さんたちで、亡くなった母親の顔に自分たちの顔をくっつけんばかりに寄せ、満面の笑顔でカメラに向かってピースサインをしていました。しかもこの写真、お母さんの死後、わずか2時間ほどしか経っていない時に撮影された、ということだったのです。

番組を見ていた私は驚きのあまり、ちょっと頭がくらくらしました。二人の娘さんは、本当に晴れやかな笑顔で写っていて、どうしたら母親が死んでまだ間もない時間に笑顔でピースサインができるのだろう、お母さんに被せられた猿のかぶり物にはどんな意味があるのだろう、いったいこの家族はどのような経過を辿って母親の死を看取ったのだろう。多くの謎とともに、その一枚の写真は鮮烈に、私の心に焼きついていました。

「私、これをもとに古城さんに芝居をつくってほしいんです。笑って死んでいける。家族も笑って見送ることができる。これって最高じゃないですか?」

蕎麦屋でSさんは、真剣な顔でそう言ったのです。

それから私とSさんは後日、そのお母さんを看取った医師・O先生に連絡を取り、順天堂大学に出かけてO先生の講演を聴きました。さらに日を改めて、山口県の周防大島(すおうおおしま)まで取材に出かけ、写真に写っていたお母さんのご遺族の皆さんにお会いして、自宅での看護の日々を聞かせていただきました。

並行して私は「終末医療の在り方」や「癌の治療法」のことなどを調べ、その後も何度か取材をさせてもらったO先生と遺族の皆さんをモデルにしながら、「笑顔のある終末医療」をテーマにしたフィクションとしての『死に顔ピース』をようやく上演することができたのです。

企画のきっかけとなったお葬式の日から、実に丸5年の時が経過していました。

「これを芝居にしないか」と私に持ちかけてくれた女優のSさんのこと水戸部千希己さんが初演同様、今回も「お母さん」役を演じます。「これは私のライフワークです」とまで言い切る彼女の、この芝居に対する思いは相当に深く、今回も並々ならぬ思いを持って笑顔で死んでいってくれると思います。(舞台上で、ですよ)

また、医師役の奥村洋治をはじめ、ほかの主要キャストも全員が初演の俳優がそのまま務めますので、彼・彼女たちもまた年月を重ねたさらに深い思いで今回の公演に臨んでくれることと思います。

「芝居の面白さ、クオリティの高さは、俳優一人一人の思いの深さに比例する」と言っても過言ではありません。その意味では今回の『死に顔ピース』、必ずや面白い芝居になります。それは断言しておきましょう。

かく言う私には、もちろんプレッシャーもあります。ですが、この芝居を上演するたびに思い出すことになる青年座のMさんに、「Mさん、初演以上に心に残る素敵な芝居にしてみせすよ」と誓いながら、心を新たに稽古の日々に挑んでいく所存です。

笑って笑って、考えて、心から泣ける芝居。

ぜひ、心待ちにしてください。

2015年12月15日

古城十忍の

お触れ書き



#17 ビーイング・アライブ

未知の「老いの日々」を描く、これはSF？ 好き勝手な世界が繰り広げられる？

歳を取らないとわからない。そういうことは実にたくさん本当にあるのだなあ、と50代になってしみじみそう思います。あちこちに出てくる体の異変（老化のことですね）、記憶の引き出しの劣化（日増しに多くなる物忘れ）はもちろん、記憶のことで言えば、若かりし10代・20代の頃のある出来事が何度も鮮明に蘇るようになり、そうか、私はあの出来事を何より強く心に刻んでいたのかと改めて思い知らされたりもします。思い出というのはたぶん、心の奥底で順位がついてるんでしょうね。

それと「死」というものが次第次第に身近に感じられるようになり、さほど怖いものではないと思えてきます。

数えて103歳(!)の現役美術家・篠田桃紅さんはその著書で、「言うなれば、体の半分はもうあの世にいますから、この世にいるよりも、少し遠見がきいて、客観視するようになったと言えるのかもしれませんが」とおっしゃってます。（『103歳になってわかったこと』幻冬舎）

まだまだ篠田さんの半分ちょっとしか生きていない私は、さすがにそこまでは思えませんが、きっとこの先も、あの世に少しずつ近づきながら、「老い」という世界の中で日々新しいことを発見し続けていくのだろうな、ということは少なからぬ実感を持って予測できます。

そう考えていくと、歳を取って老境に入るということは、もしかしたら未知の冒険に踏み出すようなわくわくすることなのかもしれません。

とはいえ一方では、やはり事はそうそう簡単ではなく、超高齢化社会に突き進む今のニッポン社会を見渡せば、「老後破産」「老老介護」「孤

立死」などなど、どうも日に日に日本は老人が生きにくい世の中になっているように思わせるニュースが目白押しです。

老いの人生は果たして、わくわくする冒険の日々なのか。不安に駆られる孤独な毎日なのか。何がその両者を分けるのか。はたまた、両者は分かちがたく共存しているものなのか。

その答えは一人一人が手探りで今日を、明日を生きていくことでしか見いだせないのかもしれませんが、ともあれ、そんな「老いの世界」を芝居で描こうとするのであれば、まだまだ若輩者の私にとって、この未知の世界は間違いなくSFだと言えるでしょう。

「老いとは、SF」。そう割り切れれば、新作『ビーイング・アライブ』は、そんなアホな、そんな無茶な、えーなんでそんなことになるの? といった何でもアリの摩訶不思議な舞台になろうが、「いやいや、これでいいんだよ。だってSFだもん」と、胸を張って好き勝手な世界を繰り広げられそうな気がします。

さてさて、どんな芝居になりますやら。

客演には松田洋治さん、木内里美さん、洪明花(ホン・ミョンファ)さん、そして長田典之くん。これまでに、作品づくりにともに四苦八苦したことのある実力派で個性あふれる面々にお願いしました。楽しみです。

ちなみに『ビーイング・アライブ』は辞書で引くと、「存命、生きている」といった意味ですが、私としては1970年初演のブロードウェイミュージカル『COMPANY』の中で歌われる楽曲『Being Alive』から取っています。

その歌には、こんな歌詞があります。

「誰かが僕に愛をせがむ 誰かが僕に愛を無理強いする 誰かが僕を縛りつけ 誰かが僕を深く傷つける 誰かが僕の席を奪い 僕の眠りを妨げ 生きていることに気づかせてくれる 僕を生かして混乱させる 褒め言葉で僕を馬鹿にし 僕は使い古されていく」

……う～ん、意味深ですね。

新作『ビーイング・アライブ』は、こんな芝居でもあるかもしれません。ふふふ、どうぞお楽しみに。

2015年9月19日

古城十忍の

お触れ書き



#16 イチエフ・プレイズ

「あの日」「あの日々」から丸4年が過ぎ、
いったい私は何を心に刻みつけたのだろう？

時が過ぎていく。それは時に残酷なことです。

2012年以降、3月11日が近づくと、毎年そんな思いが頭をよぎります。「あの日」「あの日々」から、もう丸4年以上が経過してしまったんですね……。

あの日。「これは現実、これは現実」と自分に言い聞かせながら、テレビやネットの画面に釘付けになっていたあの日……。まるで長い長い白昼夢の中にいて、不意に心臓がやたらとバクバクし、どうやって明日を生きていけばいいのか、途方もない虚無感に打ちのめされていた日々……。テレビから一斉に企業コマーシャルが消え、唯一残ったACジャパンのCMだけを何度も何度も繰り返したただ呆然と見つめ続けた日々……。

つい昨日のことのよう思い出します。

いや、思い出すと言ってること自体、それはもう風化している証拠ですね。事実、「3・11」が近づかない限り、「あんなこと」はもうなかったかのよう日々生きている自分が今いるわけで、我が身を振り返りながら、つくづく私という人間は過去の経験が学習にならない、身勝手な生きものだと思知らされます。

あの日から4年以上の時を経て、いったい私は何が変わったのだろう。何を学習し、何を心に刻みつけたのだろう。あの日、あの日々、心に渦巻いたたくさんの、さまざまな感情や思いは今、どのようなカタチで自分の中にあるのだろう。丸4年以上が経過した今、むしように掻き立てられていたあの頃の感情や思いを今一度「おさらい」し、改めて自分で確かめ

てみたくなりました。

次回公演は『イチエフ(1F)・プレイズ』と題し、『ジレンマジレンマ』と『恐怖が始まる』の再演2本立て、しかも日替わり上演という無謀極まりない企画です。(現場や地元の人たちはこう呼ぶそうですが、「イチエフ」とは「福島第一原子力発電所」のことです。福島第二原子力発電所は「ニエフ(2F)」)。

つまり次回公演は、あの日以降、何かに突き動かされるようにして「イチエフ」に関わることを脚本に書き、芝居に仕立て上げた2作品に改めて向き合ってみようと思います。

「あの日」以降、さまざまな価値観が声高に語られ、この国のカタチさえぐらぐらと揺らぎましたが、そんな状況にあって私はいったい何を本当に大事にしなければいけないと思っていたのか。その思いをまざまざと蘇らせて自分に突きつけ、本当に学習しなければいけなかったことは何だったのか。4年余という時間が経過した今こそ、2作品と同時に向き合うことでしっかりと見届けたいと思います。

手始めに、というわけでもないのですが、先日、あの頃に見続けていたACジャパンのCMを久しぶりにYouTubeで見ってみました。驚いたことに、もうそれだけでぞわぞわと、いろんなことが思い出されました。

●「こころ」はだれにも見えないけれど 「こころづかい」はみえる 「思い」は見えないけれど 「思いやり」はだれにでも見える その気持ちをカタチに

●「遊ぼう」っていうと「遊ぼう」っていう。「馬鹿」っていうと「馬鹿」っていう。「もう遊ばない」っていうと「遊ばない」っていう。そうして、あとで、さみしくなって、「ごめんね」っていうと「ごめんね」っていう。こだまでしょうか、いいえ、誰でも。

●こんにちは こんにちは ありがとう ありがとうウサギ こんばんは こんばんワニ さようなら さよなライオン まほうのことばで たのしいなかまが ポポポポ〜ン……

——ああ、そうそう、これ見ながらあんなこと思ってたなあ。徐々に鮮明になる感情と向き合いながら、同時に、「ホラ、おまえはやっぱ忘れてい

たんじゃないか」ということを突きつけられた次第です(あなたはいくつ覚えていましたか?)。CMを見ただけこうですからね、2作品とがっぷり四つに組んだらいったいどんなことになる? あなたも2作品続けて観てみたらどんなことになる? ……楽しみなような怖いような、わくわくしますね。

……などと、真面目くさって書き連ねた挙句、急に宣伝めいてしまいました、もちろん『イチエフ(1F)・プレイズ』はたかが芝居です。たかがエンターテインメントです。真面目であれば伝わるというものではない。正論が人を動かすとは限らねえ。演出家としてはそんなことは百も承知ですから、そりゃあもちろん「演劇としてすげえ面白い」「初演以上にエンタメ度アップ」という意気込みと覚悟だけはイヤというほど持って稽古に、そして初日に臨みます。

2作品とも初演から何人か俳優が変わりました。それだけで全然違った芝居になるのは間違いないですが、それにも増して数段パワーアップしたエンターテインメントをお届けするとお約束しておきましょう(ホンマか?)。……それにしても「2作品同時期公演」だなんて、こんなアホみたいにとんでもなく骨の折れること、いったい誰が考えたのでしょうか(ハイ、私ですけどね)。恒例となったアフターイベントもてんこ盛りです。お楽しみに。

2015年4月23日

古城十忍の

お触れ書き



#15 誰も見たことのない場所2015

2015年版ドキュメンタリーシアター、 「自殺エンターテインメント」をお届けします。

少し前の話になりますが、「俳優ロビン・ウィリアムスが死亡」というニュースに接して「まさか」と愕然とし、その死は首吊りによる自殺だったと知って、さらに輪を掛けて言葉を失い愕然としました。

映画『グッドモーニング・ベトナム』『グッド・ウィル・ハンティング／旅立ち』『レナードの朝』など忘れがたい作品は数あれど(アニメ『アラジン』でのまさに職人のような七色の声も)、私が未だにオノレを奮い立たせるために繰り返し観るのは、ロビンがまだ若かりし頃、31歳で主演した『ガープの世界』です。

とんでもない不幸に見舞われようと、自らの宿命を呪うことなく、今日一日一日を精いっぱい前を向いて生きていく。ロビン演じる「ガープ」はまさに私とは真逆をいく性格でした。(観るたびに、ガープのような誠実な性格に生まれ育っていたら、我が人生どんなに違っていただろうなと思わされるのですが)

……と、いつまでもロビン映画の世界に浸っていたくなりますが、書きたいことは別にあります。

それは、「なぜ私はロビン・ウィリアムスが自殺だと知って、輪を掛けて言葉を失い愕然としたのか」という、そのことです。

もし、ロビンが病死だったら、事故死だったら、同じように死因を知って愕然としたのだろうか。

答えは恐らく「NO」ですね。私は間違いなく、「自殺」というその事実にたじろいだわけです。「まさか、あろうことか、自殺するなんて」と。

ということは、私の心の奥底には今なお「自殺は特別な死だ」という認識が巣くっているわけで、そのことに思い至って私はさらに愕然としました。

なぜ日本にはこんなにも自殺する人が多いのだろう。先進国、豊かな社会と言われながら、なぜ自殺をする人が後を絶たないのだろう。

この単純な疑問に突き動かされて、今から7年前の2007年。ドキュメンタリーシアター『誰も見たことのない場所』の製作に乗り出しました。

70人あまりに取材をし、実体験に基づく貴重な言葉をかき集め、「自ら命を絶つ人の思いを少しでも理解したい」「遺された家族・友人はどんな思いに駆られるのかを少しでも知りたい」、そう思って悪戦苦闘しながらも初演の幕を開けました。

……しかし、私は何も学んでいなかったのかもしれないなあ。新聞記事を書くように、たくさんの人のたくさんの自殺の話を客観的に聞いて芝居に仕立てあげただけだったのかもしれない。表層的な理解だけで、すべてがわかったような顔をして。

私にも自殺でこの世を去った友人が2人います。口を開けば「死にたい死にたい」と言い、自殺未遂を繰り返した、一時期とても大切だった人もいました。

もちろん、そのとき私は友人や大切だった人に「何かできたのではないか?」と自問もしましたし、かといって何かできたはずもなく、ただぽっかりと、小さな空洞だけが今も心の内に残っています。

ドキュメンタリーシアター『誰も見たことのない場所2015』。今一度、自殺に向き合ってみようと思います。表層的にではなく、今度は感情で。自分自身で蓋をしていたであろう心の奥底を照らし、目をそらすことなく見つめながら。

そしてもちろん、これは芝居ですから、舞台ならではの表現方法を初演以上に模索しながら。

「2015年版」は単なる再演ではありません。新たに取材を重ね、人に

よって7年前の人に再取材し、ほぼ新作として、事実に基づく「自殺エンターテインメント」をお届けしようと企んでいます。

きっとロビン・ウィリアムスは「ガーブ」のように、本人もまた誠実この上ない人だったのだろうなと思います。だから自殺を選んだのではないかと。

では、来年3月。劇場で。

2014年12月22日

古城十忍の

お触れ書き



#14 海のとっぺん

笑って笑って笑えるんだけど、
その先に「何か」が浮かび上がってくる。

「アンタの書く芝居は一般受けはしないよね」

我が劇団の制作F女史は折に触れて私に、よくそう言い放ちます。「だって仕事で疲れて来てるのに、劇場でまた頭使ってシビアな思いさせられて、そういうのを好む人ってごくごく一部でしょ、マニアでしょ」。F女史の勢いは止まりません。「やっぱりお客さんは楽しい芝居が観たいのよ。笑いたいのよ。ああ、面白かった。それでいいのよ。そういう芝居が日本じゃ流行るのよ」

この罵詈雑言をどれだけ浴びてきたことか。

私はぐうの音も出ません。というのも演劇界を見渡せば、笑える芝居、楽しい芝居のほうが圧倒的に「勝ち組」になっているのは20年以上も前から少しも変わらぬ事実として私の前に立ちはだかっていましたから。

よおし。ならば書いて見せよう。

頭も使って、笑える。シビアな思いもして、笑える。切なくて、笑える。笑って笑って笑えるんだけど、その先に「何か」が浮かび上がってくる。

そんな高い高い高いハードルを我が身に課して書いたのが本作、『海のとっぺん』です。

その芝居に再び挑みます。初演は2000年でしたから（紀伊國屋ホール）、14年ぶりの再演です。

自ら高いハードルを据えて臨んだ芝居ですから、『海のとっぺん』はいつもの古城十忍の描く世界とは明らかに違います（たぶん……）。「演劇とは何ぞや」といった頭でっかちな芝居とはまったくもって一線を画しています（た

ぶんね……)。「ああ、重かった。ああ、疲れた」といった芝居には絶対になりません(恐らくね……)。

違いと言えば、私の芝居にしては珍しく女性が主役です(これは間違いありません)。主役以外にも女性がたくさん出ます。初演よりも必ずや面白くするぞ、と気合いも十分に入っていますので、ここぞとばかりに今回は、女性出演者を初演よりも増やしました。(だから面白くなるとは限りませんが)

ともあれ、わざわざ「人情喜劇」とチラシに堂々と謳って臨む芝居はこの作品が唯一です。(だから面白いとは限りませんが)

話は変わるようですが、私の実家は旅館でした。

宿泊のお客さんや住み込みの仲居さんや、一つ屋根の下にいつも他人がいる毎日を高校卒業まで過ごしました。なので思春期の頃の私は耳年増というか、多くの人とはあまり遭遇しないであろうことに幾つも遭遇し(客が自殺を図ったとか)、人生の悲哀を幾つも味わい(ヤクザが乗り込んできて女性客の髪をひつつかみ、引きずり回して連れ出したとか)、仲居さんたちとは賭博に明け暮れておりました(花札、麻雀は小学生でマスター)。で、その頃の多感な少年(私ですよ)のささやかな願いは、「ちっちゃい家でいいから家族だけで住みたい」というものでした。いやあ、可愛かったなあ、あの頃の俺。

でもって、『海のとっぺん』は「家を建てる話」です。旅館も関係してくるので、本作にはちょっとばかり私の自伝的な要素も詰め込まれていたりします。

ね? なんかこれまでの芝居とはずいぶん違うような気がしてきたでしょう?(気だけかもしれませんが)

さてさて。いつもとひと味もふた味も違う本作は、客演陣もいつにも増して多彩です。まず、ジャニーズ事務所の町田慎吾くん。初参加です。#6『ジレンマジレンマ』でクールな刑事を演じてくれた長田典之くん。もはや劇団メンバーのごとく出演回数を重ねる武田竹美さん。それに加えて初参加となる、うら若き女優たちがずらずら〜と顔を揃えます。ね? 吉祥寺シアターに行ってみたくありませんか?(責任は持ちませんが)

2014年9月3日

古城十忍の

お触れ書き



#13 毒舌と正義

「壊れていく教師たち」

モンペにモンスに、本当の敵はどいつだ？

学校の教師が今かつてないほど、トンデモナイことになっている。らしい。そういう話を最近よく聞く。「モンペがすごいんだよ」と言われ、田舎のオバサンの作業ズボンかと思っていたら、「モンスター・ペアレント」のことなんだと。そのモンペや、教師を教師とも思わぬ生意気な生徒、おまけに体罰はもちろん、制約事項にがんじがらめにされて、果ては鬱病になってやめていく先生が後を絶たない。だそうなの。いや、大変だ。

我が身を振り返れば、いやあ、どうしようもないクソガキでした。中学3年のときの担任が嫌いで嫌いで、クラスのみんなを煽動して授業はボイコットするわ(グラウンドに出てバレーボールなんぞやってました)、ボイコットをやめて授業に出るようになっても全員で示し合わせ、指名されたら「答えたくありません」と答え、挙げ句の果てには図体のデカイ男子7、8人でその先生を囲み、「おまえに担任の資格はない、担任やめろ」などと平然と言い放っていましたからね。いやあ、怖い怖い。モンペならぬ、モンスですね。モンスター・スチューデント。いやはや。

今思えば、まだミドルティーンだったその頃の私には、その担任のあからさまな「えこひいき」と、出来の悪い奴に限って職員室に呼び出して吊るし上げる「教師」という殻をかぶった傲慢さがどうにも許せなかったんですね。いやあ、若い若い。

しかし、私も歳を取りました。今じゃ、「えこひいき」なんて、あって当たり

前。というか、「えこひいき」されてナンボでしょ。出来の悪い奴なんて、そりゃ努力が足りないからでしょ。こっちだって出来の悪い奴に付き合ってるほど暇じゃねえんだし。演出家としての我が心の奥底を覗けば、ハッキリそう思ってる自分がいますからねえ。

いやいや、とはいえそれはやっぱり、「自ら進んであることを目指している人たちだけが集まってる世界」であればこそ通用する話。俳優を目指している若者になら、「そんなこともできないようじゃ才能ない。見込みゼロ。さっさとやめちまえ」と罵詈雑言も浴びせられるけど(浴びせていいのか?)、半ば強制的に行かせられているとも言える「学校」という世界で、おまけにまだ海の物とも山の物ともつかない十人十色の子どもたちを相手に通用する話ではありません。

というわけで、約1年ぶりとなる新作は「教育」、というか「教師」たちを描きながら、人間というものを見つめたいと思います。

聖職とも言われる「教師」とは、どういう人であるべきなのか。ほんとに「えこひいき」はダメなのか。体罰は許されないのか。許されないとしたら、なぜなのか。そもそも教師は子どもたちに何を望んでいるのか。「教育」とは何を教え、何を育てる人なのか――。

今回の客演には実にバラエティーに富んだ面々がそろいました。この多彩な顔ぶれにワンツーワークスの俳優が加わり、そのほとんどが「教師」を演じます。生徒は一人も登場しません。(たぶん)

前回の『流れゆく庭―あるいは方舟―』では、二つの部屋の出来事を一つの部屋で同時に進行させる、という演劇ならではの手法でお届けしましたが、本作でも演劇だからこそ可能な表現方法をぞんぶんに施して、「これだから演劇は面白えや、観るのやめらんねえや」という作品をご覧にいれようと思います。(気持ちだけは)

2014年3月25日

古城十忍の

お触れ書き



#12 流れゆく庭-あるいは方舟-

「自分だけは安全」

その心理はどこから来るのだろうか？

「災害列島」。そう名づけられてもおかしくないほどに我がニッポンは毎年毎年、台風や集中豪雨に見舞われるが、見舞われるたびに不思議に思うことがある。

「なぜ、こうも毎回毎回、死者が出るのか？」

このことが、どうにも理解できない。

増水した川を見に行った。増水した用水路に落ちた。冠水した道路を車で突き進んで身動きが取れなくなった。……理由を聞けば聞くほど、不思議な思いはますます募る。

「なぜ、危ないと思われるところに人はわざわざ自ら出かけるのか？」

まさか、好奇心旺盛だったから、というだけではあるまい。何かしら、私にはわからない「のっぴきならない事情」があったのかもしれないが、それにしても犠牲者が多すぎる。毎年毎年繰り返される同じようなニュースが、なぜ次の災害のときに情報として生かされないのだろう。

「地滑りが起こって土石流が自宅になだれ込んだ」という、一見、予測不能の事態に思えるケースにしても、裏手に山の斜面がある場所に自宅を持った以上、短時間に雨が集中して降れば地滑りは十分に起こりうると考えそうな気がするのだが、こうした被害も繰り返されて起こっている。

もしかしたら日本人には、「自分だけは安全」「自分がそんな目に遭うはずがない」という心理が相当に強く働いている、ということなのか？

そういえば、外国での日本人旅行者は見るからにスキだらけで置き

引きやスリに遭いやすいと聞いたことがある。福島第一原発事故も根拠もなく日本全体に蔓延していた「安全神話」が事態をいっそう深刻にしていた。

……などと書き連ねながら我が身を振り返ってみると、いざ自分がそういう危機的状况に遭遇したら、生き延びられる自信はまったくもって…
…ない。なんせ、根が無精者。「まあ、いっか」とすべてにいい加減な性格。その上、今や体力も気力も衰えしか実感できない老年に近づいているので、よほど運がよくなければ私は助かりそうにない。

今回の『流れゆく庭―あるいは方舟―』は、集中豪雨のお話です。

一跡二跳ファイナルとして2008年に上演した作品の改訂版ですが、「東日本大震災」を経験して、果たして私たちの「危機意識」は何かしら変化したのか、あるいは変わっていないのか。そのことを改めて考えてみたいと思います。

不思議なことに「3・11」以降、毎年、3月11日には芝居の真ただ中にいます。

丸1年にあたる2012年3月11日は、まさに福島原発事故後の諸問題を描いた『ジレンマジレンマ』の千秋楽。丸2年の2013年は『奇妙旅行』を前日に終え、まだ余韻を引きずりながらの片付けの日。そして2014年も本作、『流れゆく庭―あるいは方舟―』の上演中に3月11日を迎えます。

これはやはり、「3・11」以降、「私たちの何が変わっているのか、改めてよくよく考えなさい」という何かの啓示なのかもしれない、などと思ったりもしますが、これはちょっと考えすぎか……？

というわけで6年ぶりの上演となりますが、出演俳優はずいぶんと変わります。客演陣が多彩です。しかも初めての出会いとなる俳優が3人もいます。

まず、文学座の佐川和正さん。端正な顔立ち、とてもアラフォーとは思えません。続いて、これまたイケメンの今村洋一さん。ただ今、若手実力派として引っ張りだこです。そしてワンツーワークスのワークショップに参加、見事、出演決定を勝ち取った早川紗代さん。さらにさらに、もはや常連と言ってもいい、武田竹美さん。昨年の『恐怖が始まる』に続いての出

演です。

劇団からは『奇妙旅行』以来、1年ぶりに重藤良紹が復帰します。もちろん、奥村洋治、関谷美香子、山下夕佳ほか、劇団メンバーも満を持して臨みます。

アフタートークの特別ゲストには、『人はなぜ逃げ遅れるのかー災害心理学』（集英社新書）の著者で、東京女子大学名誉教授の広瀬弘忠さんを迎えます。災害に見舞われたときに生き延びる自信のない私としては、ぜひ「生き延びるための秘策や心構え」をお聞かせ願いたいところです。（8日）

このほか、『恐怖が始まる』で好評をいただいた「公開ダメ出し」（7日）、その『恐怖が始まる』で競演した3女優によるトークセッションもあります。（10日）

おまけに今回は、久々に「バックステージツアー」も企画しました。奥村洋治・日暮一成の案内のもと、「芝居の裏側」を覗いてみてください。（9日）

2013年も間もなく終わります。皆さん、どうぞよいお年を。私もなんとか生きながらえました。来年も劇場で生ある限り、何度も何度も逢瀬を重ねましょう。

まずは3月、お待ちしております。

2013年12月26日

古城十忍の

お触れ書き



#11 息をひそめて-シリア革命の真実-

「Pass on my story!」

その切実さに心をはくはく揺さぶられる。

遠距離恋愛はうまくいかない。

という話はよく聞く。それぞれの地でお互いにそれぞれの生活があり、そのさなか、時に切々と相手のことを思ってみても、その思いはなかなか伝わらない。携帯電話にLINE、ツイッター、facebookと、今やSNS花盛りの情報化社会にあっても、本当のことはなかなかわからない。距離の遠さは、やがて時間のズレを生み、悲しいかな思いのズレへと至る。それほどに「距離がある」ということは「大きな壁」を生む。

遙か中東の国、シリアが日に日に、トンデモナイことになっている。毎日毎日、多くの人が殺されている。殺し合いが続いている。

今回の公演、『息をひそめて-シリア革命の真実-』の台本を翻訳家の霜康司さんから「読んでみてください」と渡されたのが、もう1年近く前。その頃にはシリアはすでに悲惨な内戦状態に突入していて、その激しい内戦へと至る様子を何人もの兵士や普通の市民にインタビュー取材を行って書かれたこの脚本は、まさに筆舌に尽くしがたい「トンデモなさ」のオンパレードで、僕は読み終えて激しく心を揺さぶられた。「これ、すべて事実なんだよな、絵空事じゃないんだよな」と思うと、さらにはがくがくと居ても立ってもいられない気持ちになり、「この事実を伝えなければ」と上演に向けて一気に心を突き動かされた。

こう書けば、まるで僕は「正義の人」みたいに思えるが(なわけないか)、実は演劇人としては、来年上演する頃にはとっくに内戦は終わっ

て、「何を今ごろ、こんな芝居やってんの?」という時代遅れのようなことになりはせぬかと、やましさと不安も上演を決めた頃には持ち合わせていた。

ところが、全然そんなことにはならず、状況はますますトンデモナイことになっている。つい10日ほど前には、「化学兵器(毒ガス)で1300人以上が死亡か?」という耳を疑うようなニュースに驚愕させられ、今や「アメリカがついに軍事行動に出るのか?」という末恐ろしい事態に直面している。

もしアメリカが軍事行動に出れば、アメリカの子分である日本だって何かしらの行動を起こさなければならず、「だってずいぶん距離のある、なじみのない国の話でしょ」と無関心だった人たちも少しは物申すようになるのかもしれない。

いやいや、それより何より、シリアはどうなってしまうんだ。シリアの市民はあと何万人、殺されることになるんだ? どれだけ殺されれば、彼らは死の恐怖から逃れることができるんだ? 彼らはただただ自由を求めて、民主化を求めて抗議デモを始めただけだったのに。

『息をひそめて』は昨年7月にロンドンで上演された作品なので、この1年のさらにさらに混迷を極め、悲惨さを極めている最近の状況は脚本に反映されていない。それでも僕は今、「必ずや演劇としても素晴らしい作品にして上演しなければ」と心新たにしている。

この脚本には「Pass on my story!」=「私の話を伝えて!」という台詞が切実に語られる場面があるが、まさにその通り。どんなに距離があろうとも、この「大きな壁」にはたとえどんなに小さな穴であろうと開けなければならない。

今回の上演に際し、ロンドン初演で取材も行い演出も務めたゾウ・ラファティさんと、初演プロデューサーのクリス・フォクソンさんが来日してくれることになった。僕らが上演許可の申請をした時点から彼らはひどく日本に来たがっていたのだが、「日本ではそんなにシリアに関心が高いのか?」ということに驚いて、その実情を確かめに来たいのかもしれないなあ、と僕は思っていた。

この「イギリスとシリアの距離、日本とシリアの距離」については、ゾウさんがアフタートークに出ていただけることになったので、ぜひ聞いてみた

いと思う(12日)。

アフタートークには、シリア情勢に詳しい東京外国語大学教授の青山弘之氏も登場していただく。まったく面識がないにもかかわらず公演の趣旨を説明したメールを送り、「ぜひお話をお伺いしたいのですが」とお願いしたところ、

「過度に単純化され、実態がまったく踏まえられていないシリア情勢観(勸善懲惡と言いますか、予定調和と言いますか)を何とか改める機会があればと思っておりました。喜んでお引き受けいたします。」

と、快諾していただいた。オールの誤解や勉強不足を人前でさらすことになるやもと恐れはありつつ、青山さんとの話も今から楽しみにしている(14日)。

伝えてみせましょう、なぜシリアがこうなってしまったのか。そういう事態に陥ったとき、人間はどういう行動に出るのか。どう生き延びるのか。

ぜひ、観てやってください。心からお待ちしています。

2013年8月31日

古城十忍の お融れ書き 番外編

奥村洋治の



へい、皆の衆

日本の演劇人を育てるプロジェクト

新進演劇人育成公演 虚人の世界

こりゃ、なんだかいいじゃん。

どうもお、奥村です。

ん？ いや役者の、ほら、ワンツーワークスの、前回『奇妙旅行』で「一回お休み」なんて馬鹿げたこと言い出して顰蹙かった、双六じゃねえんだから、そうそう、奥村洋治でんがな。

で、『恐怖が始まる』の初日がまだ開いてもないのに、その次の芝居が『虚人の世界』。こっちがもう着々と進行してるってわけなのさ。

自分にしか見えないもの。お宅にもある？

自分にしかわからない感覚。と置き換えると、「イエス」の人もっと増えると思うけど。増えるというより、万人がそうだよね。

「虚人」という、これは作者・川津羊太郎さんの造語だと思うけど、なんか興味湧くねえ。虚人って、どんな人？ え？「人」ってんだから、人でしょ？

第一稿を読んだ時、川津さんにしか見えない世界？ という気配を感じ、「こりゃなんだかわからんぞ」、と不安に駆られた記憶があるわけ。

と同時に、『ホムンクルス』を思い出したのさ。何年前だっけ、「ビッグコミックスピリッツ」に連載された、確か山本英夫っちゅう人の漫画で、人のトラウマに基づく深層心理が具現化して見えるっちゅう、そう、人が異形のモノに見える設定でして、砂でできた人間とか、グッピーが映る水のかたまりに見える人とか、ちょっとうまく文章じゃ表現できないけど、変な世

界だったなあ。

あれと、「虚人」って似てる？ パクリ？ いや、似てないなあ。あれは深層心理だもんなあ。機会あったら『ホムンクルス』、見てみてちょ。

あ、そんなことはどうでもいいんだ。で、第一稿について古城さんとのやりとりがあったらしく、第二稿は川津さんも同席してもらって劇団員で読み合わせをやったのさ。あ、客演の島田雅之さんも来てくれたわ。その後、居酒屋に移動してまた作品の話になり、うちのメンバー全員、まあ、言いたいこと言うわ言うわ。ま、俺もその一人だけだね。

川津さん、激昂もせず、ニコニコ話聞いてくれてお帰りになりましたがね、ありゃ、いくらなんでも作家に対して失礼なんじゃなかったか？ と反省しきりではありますが、聞くところによると、それを参考にまた少し書き直しが入ったらしく、こいつあ楽しみだな、というところなわけさ。

こうやって、古城氏言うところの「作品のブラッシュアップ」を図り、観客の皆様によりよいモノをご披露すべく、地道に作業が続いていくわけだな。

だからね、最初いくぶん川津さんにしか見えない世界の気配だったのが、少しは俺らにもわかるようになったのね。んで、わかった部分は「こりゃ、なんだかいいいじゃん」、なわけさ。

いける。

2013年5月15日

古城十忍の

お触れ書き



#10 恐怖が始まる

どんなに「見て見ぬ振り」を続けようとも、
「恐ろしいこと」は確実にやって来る。

奇遇なことに、ほんとにたまたまそうなたただけのことなのですが、去年の3月11日は、#6『ジレンマジレンマ』の千秋楽当日、今年の3月11日は、#9『奇妙旅行』の千秋楽翌日でした。

去年は千秋楽のカーテンコールで観客の皆さんにもお願いして一緒に1分間、黙祷しました。今年は、「前日だけど、今年もカーテンコールで黙祷する?」と劇団メンバーと話したりしたのですが、前倒ししてするもの何だかなあという話になり、結果、今年はしませんでした。

あれから2年――。

去年、「あれから1年」と思ったように、今年もそう思いました。来年もたぶん、あれから3年と思うことでしょう。

でも4年、5年と経つうちに、やがて、「え、あれからもう10年なの?」と、遠い思い出を掘り起こすようにして話す日が来るのかもしれませんが。それが10年でそうなるのか、20年でそうなるのか、もっと先までかかるのかわかりませんが、時が経つほどに風化していくのは間違いありません。

東日本大震災で無情にも亡くなった方は、1万5881人、行方不明の方は2668人、合わせて1万8549人にのぼります(2013年3月11日現在、警察庁発表)。

いったいこんなに多くの命を弔うのに、どれだけの年月をかければ遠い日の出来事にできるのでしょう。…………。

一方、「3月11日」は福島第一原発での未曾有の事故も引き起こしました。こちらは2年あまりが過ぎた今も、いったい原子炉の中はどうなっているのか、いったいいつになったら危険性がなくなるのか、まったくもって掴めていません。

安倍首相は今年の3月14日、かつての野田政権が一方的に出した「収束宣言」をようやく撤回しました。「いや実は、原発の危機はまだ終わっていませんでした」、それだけのことを認めるのに丸2年がかかったことになります。では、本当の「収束」はいったいいつになったら宣言できるのか、それは誰にもわからない。それが正直なところでしょう。

一説には廃炉作業には30年、40年かかると言われていますが、こちらは時が経つほどに、風化していくどころか、今まで経験したことのないとんでもない恐ろしい現実と私たちは（私たちの子孫は）向き合わねばならないことになりそうです。見て見ぬ振りを続けても、「恐ろしいこと」は確実にやって来るに違いないのです。

これはとりもなおさず、「想像力」の問題です。

5年後、私たちはどこまで「見て見ぬ振り」ができるのか。10年後、私たちはどんな恐怖に怯えているのか。20年後、福島は、日本は、私たちは、どうなっているのか。……。

新作『恐怖が始まる』では、つたない頭ながら、この想像力を駆使して、「恐ろしいこと」の正体に迫りたいと思います。「想像力こそが演劇の最大の力である」、そう信じて。

ところで、今回は何をトチ狂ったか、アフタートーク・セッションで「公開ダメ出し」なんぞをやります。誰に魔の矛先が向かうのか、いったいどんなダメが飛び出すのか、まさか、その場でもう一回やれ、なんてことにはならないよな？

俳優たちの間では、「恐怖が始まる」ってこのことじゃねーの？ と早くも暗澹たる空気が流れているようです。

トS演出家としては実に楽しみです。燃えます。

2013年4月6日

古城十忍の

お触れ書き



#9 奇妙旅行

「もう一度、刺してください。」

「拒否なさいますか?」

—11年ぶりに鮮やかに蘇る「復讐劇」。

突然ですが——

今までに誰かを、心底憎んだことはありますか?

この世から抹殺したいほどの憎悪を、誰かに募らせて身を焦がしたことはありますか?

——僕は、あります。

20代のときに二人、40代のときに一人。いえいえ、「プチ殺意」まで含めると、10人は下らないかもしれません。それはとりもなおさず僕が負けず嫌いで、好戦的で、子どもの頃から「仮想敵」を想定することで自分を鼓舞し続けてきた偏屈な性分だからかもしれません。

ワンツーワークスの次回公演『奇妙旅行』は、底のない憎悪を抱えた人たちと、そのあらがいがたい憎悪を向けられた人たちの物語です。

「殺せ」「殺せ」「この手で殺せ」……。始めから終わりまで、激しい感情が途切れることなく増幅し続ける。なんとも痛い、そしてなんともやるせない物語です。

初演は2002年。今はもう失われてしまった新宿のTHEATER/TOPSで上演し、自分で言うのもナンですが、ハードな内容にもかかわらず評判は上々でした。

以来、何度も何度も再演候補に挙がりながら、なかなか再上演する機会がないまま、あっという間に11年が過ぎてしまいました。(劇団も一

跡二跳からワンツーワークスへと変わりましたし)

長い歳月を経て、改めて『奇妙旅行』を読み返してみたところ、真っ先に、「ああ、何にも変わってないんだなあ」という思いが頭をよぎりました。

相も変わらず、誰かが誰かを殺したというニュースが毎日のように流れます。世界に目を移せば、パレスチナとイスラエル、シリアの内乱を挙げざるまでもなく、国家と国家、民族と民族の間でも絶え間ない殺し合いが続いています。

「やられたら、やり返せ」。その繰り返し。果てることのない、繰り返し…。人間はもうどうしようもなく、救いようのないバカなのかもしれません。

この「復讐の連鎖」は、どうして断ち切れないのだろう。何か、断ち切る術はないものだろうか。『奇妙旅行』を書き始めたきっかけはそんな思いでした。

最初に僕は「誰かを殺したい」と心底思ったことがあると書きましたが、「あんな奴、死んでしまえ。抹殺してやる」という「負の感情」を持ち続けるには、相当なエネルギーを必要とします。胸のあたりにどっかりと思いを抱えさせられて、毎日毎日が苦しく、常に吐き気が込み上げてくるような状態が続きます。そう、「誰かを憎み続ける」という感情は、自分自身の身も心もズタズタにしてしまうのです。

初演から11年。とんでもなく苦しいことだけど、今一度、その「負の感情」と向き合う必要があるのではないか。「心底、憎み続ける」という苦しさを疑似体験しなければ、人間は今以上に愚かなことを繰り返すのではないか。

そんな思いに今、強く駆られています。

これまでになく悪化している日中関係、日韓関係。いつまでも脱却できないデフレ。なかなか改善しない経済格差。明日の見えない閉塞感。自暴自棄になりたい環境ばかりに覆われているからこそ、向き合わなければならないのではないか。

「やられたら、やり返せ」。それとも、「やられても、やりかえさない」。

個人として自分はどちらを選ぶのか。その確固たる答えを導くために――。

この辛く苦しい旅人に、客演として迎えるのは、#4『又聞きの思い出』

に出演してもらった青年座の尾身美詞さん、09年の『トーキング・トゥ・テロリスト』で『奇妙旅行』に負けず劣らずの苦しい思いを抱えてもらったノックアウトの土屋良太さん、#6『ジレンマジレンマ』で「個人の正義」と向き合ってもらった奥本真司さん。この3人はいずれも2回目の出演になります。そしてもう一人、今回初参加となるユニークポイントの洪明花さん。実力者がずらりと揃い、演出家としては頼もしい限りです。

ワンツーワークスからは、約2年ぶりの舞台復帰となる重藤良紹、そして初演の『奇妙旅行』にも出演した関谷美香子、山下夕佳。それに若手から日暮一成、原田佳世子が加わります。(一跡二跳時代を含め一度も出演が途切れたことのなかった奥村洋治は今回初めてお休みします。その理由は「かわら版」にて)

たぶん今回も、胸が締め付けられるような苦しい芝居になると思います。緊張感みなぎる2時間になると思います。半端な気持ちでやれるような芝居じゃありません。俳優ともども、覚悟して臨みます。

あなたもどうぞ、覚悟して観に来てください。

2012年12月21日

古城十忍の

お触れ書き



8 産まれた理由

さまざまな人の声に耳を傾ける。
「妻」も「夫」も十人十色。
「妊娠・出産」を巡るドキュメンタリー。

それは、飲み会の席でのことでした。

どういふ話の流れだったかは定かに覚えていないのですが、「うちの子ども、おなかの中にいたときのことを覚えてるんだよね」。一緒に飲んでいいた40代半ばの男性がそう言って、子どもが喋ったという内容を事細かに語り始めたのです。にわかに信じがたい話で、そもそも前世とか霊的なこととかをまったく信用していない猜疑心の塊のような演出家は、彼の話がひと段落したところであれこれ難癖をつけるべく口を開こうとしたところ、同席していた今度は同じ40代の女性が、「うちの息子にもあるよ、胎内記憶」、そう言ったのです。

「胎内記憶……?」。恐らく、この言葉を明確に認識したのは、このときが初めてです。もちろんその女性も、自分の息子が語ったという「おなかの中の記憶」を実に詳しく聞かせてくれました。

「……ここには、俺のまったく知らない世界がある」……。信じる・信じないはともかく、聞きながらそんなことを思いました。

その飲み会はそれからひとしきり、「胎内記憶」から始まって、「妊娠中、苦労したこと」「出産した時の状況」「赤ちゃんと初めて対面した時の思い」「子育ての大変さ」……などなど、かなり笑えた話もありましたし、大いに盛り上がりながら、次々に「僕のまったく知らない世界」の話が展開していったのです。

僕には子どもはいません。そもそも男ですから、「妊娠・出産」のことはまったく自分の世界の外にあることだと思っていました。しかし僕自身、別の状況では「日本は少子高齢化社会だからね」などと、したり顔で言ったりしていたのです。我が国がどれほどの少子化に直面しているか、日本にはいったいどんな子育て支援の取り組みがあるのか、そういったことを知りもしないで。

それに考えてみれば、男であっても「妻の妊娠こそがすべて」という生活を送っている不妊治療中の男性だっているわけです。共働きで毎日毎日、保育園に子どもの迎えに行くという知り合いがいることも思い出しました。

……これは「知らない世界」ではすまされないぞ。

演出家としては次第にそう考えるようになりました。我が国の現在の「妊娠・出産」をめぐる状況を調べていけば、そのことだけでなく、もっと広い意味で「今の私たちが生きる社会」が見えてくるかもしれない、と。

こうした理由から、5年ぶりに取り組む新作の「ドキュメンタリーシアター」のテーマを「妊娠・出産」にすることにしました。

僕は以前、劇団一跡二跳時代に、『愛しすぎる男たち』という不妊治療をテーマにした芝居を書いたことがあります。あれも思い起こせば1994年の上演ですから、今から既に18年前。日本に初めて「精子バンク」が登場したのもその頃からでした。

本作『産まれた理由』では18年前よりも、もっともっとたくさんの人にインタビュー取材を行い、たくさんのさまざまな声に耳を傾けることにします。

ですから本作は「胎内記憶」だけがテーマの芝居ではありません。「現在、妊娠中の女性」「自分の精子を無償で提供し続ける男性」「不妊治療に励む夫婦」「流産経験を持つ女性」「去年の東日本大震災直後に被災地で子どもを産んだ女性」「何より自然分娩に重きを置く助産師」「アメリカで代理母の斡旋をする女性」「子育て支援に取り組む自治体の担当者」……合計80人を超える人から「知らない世界」についての言葉を集めてみます。

そして、そこから何が見えてくるのか。どんな世界が浮かび上がってくるのか。たくさんの「嘘偽りのない言葉」を通して、それを皆さんと一緒にぜひ見届けたいと思っています。

出演者はワンツーワークスのメンバー加えて、西海真理さん、藤 敏也さん、藤村忠生さん、瀬山英里子さん、永川友里さんを客演に迎えます。ドキュメンタリーシアターの第1作『誰も見たことのない場所』に出演してもらっている方がほとんどなので、演出家としては心強いです。(ドキュメンタリーシアターの制作過程は俳優もホントに大変な作業の繰り返しなんです)

今はそれぞれが取材してきた人の報告を聞く作業を稽古場で繰り返していますが、いやいや実に面白いですね。ぎゃはぎゃは大笑いした話もあれば、全員でわいわいがやがや、大いに議論になった話もあります。

演出家としては、こうしたエピソードをひとつにまとめ、1本の芝居へとつくりあげていかないといけないわけですが、大丈夫、きっと面白くなります。

確信しています。

2012年8月28日

古城十忍の

お触れ書き



7 みんな豚になるーあるいは「蠅の王」ー

「あの、いやあ〜な空気」を
2倍にも3倍にもして再上演。

再演します、『蠅の王』。

初演からわずか、1年半での再演。周囲に巻き起こる、「無謀だ、客が入るのかよ?」という至極当然な声を無視して断行します。それだけ気合十分です。少なくとも演出家は。

気合が入っているので、劇作家はタイトルも変えました。タイトルだけを変えたわけではありません。それではバカです。もちろん、台本も少々手直ししています。演出家は演出も変えるはずですよ(たぶん)。とんでもなく難しい技術を俳優に要求する「ムーブメント」も一段とパワーアップするはずですよ(恐らく)。

つまり、そのままの再演ではなく、改訂版です。ということはつまりつまり、「あの、いやあ〜な空気」がじわじわと劇場全体に広がり、観ている人はいつしかじっとりと腋の下に汗をかく。そんな胸クソ悪くなるような芝居が再びお目見えするのです。

なにしろパワーアップ版ですから、「あの、いやあ〜な空気」はさらに濃密に、胸クソの悪さは2倍にも3倍にもなり、観ている人はきっと胸クソの悪さを通り越して、汚辱にまみれた我が人生を振り返り、やがて悟りの境地に達し、もしかすると観劇後に会社を辞めてしまう人が続出するかもしれません。当日はぜひ、「辞表」をしたためてご来場ください。

とまあ、バカな演出家のバカな妄想はここまでにして、再びの『蠅の王』、今回は『みんな豚になるーあるいは「蠅の王」ー』というタイトルで、

装いも新たに「パワーハラスメント」「職場いじめ」の実態をこれでもかといぐり出してやろうと思っている次第です。

実は初演後、「面白かった、刺激的だった」と好評の声を想像を超えてたくさんいただき、喜びに舞い上がると同時に、そうか、世の人々はこの芝居の世界以上に、過酷な現実を日々生きているのだなと改めて思い知らされました。実際、「うちの職場なんてもっとひどい」という声も多数聞かれましたし、ならばもっときちんと、あるいはそれ以上に現実を映し出す芝居にしなければと、再演に踏み切ることにしました。

会社であれ学校であれ、集団にはおのずと力関係が生じてしまいます。ではいったい、なぜそうになってしまうのか。

その理由は恐らく、大半の人が「自分の地位はこの集団内でどこにあるのか?」ということのを心の中で計り、「あいつよりは上、あいつには負ける」と進んで自分の地位を自分で決めているからではないのか。たとえ地位決定に関心がない人であっても、集団から孤立してしまうことの恐ろしさは本能的に感じ取っている。ゆえに無関心を装いながら自らに忍耐・我慢を強いることになり、いつしか力関係に呑み込まれてしまう……。

改訂版となる『みんな豚になる』では、そのあたりの「人間のしょーもなさ」をより鮮明に浮かび上がらせることができればと目論んでいます。

キャストも一部、初演から変わります。客演には初演からの続投となる武田竹美さんに加え、『死に顔ピース』に続いての参加となる藤敏也さん、そして23歳と25歳の若き二人のイケメン、林田航平と片桐レイメイを迎えます。

恒例のアフタートークでは、「パワーハラスメント」の専門家である労働ジャーナリストの金子雅臣さんをお願いしてパワハラの実態を詳しく伺いする回も企画しました。劇団で日々、俳優たちにこれでもかと罵詈雑言を浴びせ続けている底知れぬパワハラ演出家には相当に耳の痛いトークになるかもしれませんが。

あ、もちろん、俳優たちによるトークもあります。それに翻訳家の鈴木小百合さんとも原作である『蠅の王』について、あれこれと意見を出し合いながら、その本質に迫るトークができればと思っています。

鈴木さんには同封した「かわら版」にも文章を寄せてもらいましたが、そうなんです、今回の戯曲、出版されることになったんです。しかも英語

版まで併録された豪華版です。なのでワンツーワークスでの再々演のあかつきには、俳優全員が「Fuck You!!」を連呼しまくる芝居に……ってことはないか。

それにしても、あー、稽古が楽しみ。パワハラ芝居の稽古をやりながら、身をもってパワハラを満喫できるかと思うと、演出家は一刻も早く稽古場に飛んでいきたい気分です(おいおい)。その成果を楽しみに、待て。

2012年4月25日

古城十忍の

お触れ書き



6 ジレンマジレンマ

現代の「正義」について考えてみます。
着地点はまだ見えていません。

2012年は皆様、快調にお過ごしでしょうか。

私はといえば、昨年11月の『死に顔ピース』から立て続けとなる新作『ジレンマジレンマ』の準備のため年末も年始もあたふた。相も変わらぬ芝居のスケジュールに追われまぐりの2012年を歩き出しております。

さて、『ジレンマジレンマ』です。今回の新作はタイトルから察しがつくように、「囚人のジレンマ」を発想の拠り所にしていきます。

「囚人のジレンマ」とは、「葛藤」のことですね。

「裏切りたいという欲求」と「裏切れないという自制」、そのせめぎ合いが果てしなく繰り返される。このせめぎ合いに解決の糸口はあるのか。あるとしたら、それはどこに着地するのか。

それはまだ正直、はっきりとは見えていないのですが、ひとつ明確に企んでいるのは、人間の本性をいやらしいほどに鋭くえぐり出したい、ということです。

演劇とは何か？ テレビドラマや映画、小説にはできなくて演劇にできる表現とはどんなことなのか？

そのことだけを考えて30年近く、演劇に向き合ってきたと言っても過言ではないのですが、今回はそんなインテリ気取りのような発想は後回しにして、「すさまじい会話のバトル」をやってみようと思っています。

そのバトルに今回客演として参加してくれるのは、2003年の『パラサイト・パラダイス』以来となるスーパー・エキセントリック・シアターの永田耕一さん。08年の『流れる庭—あるいは方舟—』以来となる長田典之くん。そしてワンツーワークス初参加となるのが、文学座の永川友里さん、フリーの奥本真司くん。

お互いに初顔合わせの人ばかりなので、果たしてどんなバトルが繰り広げられるのか、火花散る競演が今から楽しみです。

そして、アフタートークにお迎えするのは東京新聞社会部新聞記者の片山夏子さん(6日)。片山さんは現在、福島第一原発の取材に日夜明け暮れていらっしゃいます。その取材を通して見えてくる「正義」といったものについて二人で語り合えたらと思っています。

俳優によるアフタートーク(8日)では、永田耕一さんに、我がワンツーワークスから奥村洋治、関谷美香子が加わって、「私のジレンマ」というタイトルでトークを繰り広げます。思いもよらぬ俳優たちの素顔や、『ジレンマジレンマ』の裏話が飛び出したりするかもしれません。

こちらもどうぞお楽しみに。

まだまだ若輩で小さな劇団ですが、メンバー一同、「まだ見ぬ新しい芝居」を追求していきます。どうぞ本年もよろしく。

2012年1月5日

古城十忍の

お触れ書き



5 死に顔ピース

「死」を身近なものとして
見つめ直す旅。

「パッチ・アダムス」という人を知っていますか？

1945年生まれ、現在66歳。アメリカの医師。「病気に苦しむ人こそ笑いが必要」との考えから、「ユーモアのある医療」を提唱・実践。

その活動の歩みは1998年に、かの演技の天才、ロビン・ウィリアムズ主演で『パッチ・アダムス トゥルー・ストーリー』という映画にもなりました。「病院で心のケアを担う道化師」を意味する「ホスピタル・クラウン」という言葉も概念も今でこそ認知され始めていますが、その草分けとなった人でもあります。

知ったかぶりの書き出しですが、実は私、この人のことをよく知りません。特別な興味ありません。ある「ひよんなこと」に興味を抱いて、あれこれ調べていくうちに「パッチ・アダムス」に行き当たり、それで映画も観て、ちよつとばかし本も読み、「へえ、こんな人がいるのか、面白えな」と思った次第です。

「ひよんなこと」というのは、フジテレビのニュース番組でした。

その特集コーナーで、助かる見込みのない末期癌の患者とその家族の闘病生活の様子が取りあげられていたのです。

大雑把に言えば、「末期癌の患者が笑いながら死んでいく」、看護する家族も「笑いながら死にゆく肉親を見送る」という内容で、その「死」と「笑い」のダイレクトな結びつきに、たまたまテレビを見ていた私は、びっくり仰天、となったわけです。

癌に冒されながら笑って死ぬる？

人間、どんな境地に至れば、そんなことが可能なのか?

ニュースで取りあげられたということは、これはまだまだ特殊なケースなのか、それとも既に終末医療のひとつの在り方として一般化してきているのか?

頭の中が疑問符だらけになった私は、それ以降、時間を見つけてちょぼちょぼと取材を始めました。山口県の病院まで取材に行ったり、順天堂大学医学部に講演を聴きに行ったり、発端となったフジテレビのニュースで取りあげられていた家族(遺族)の方々にも会って話を聞いたりもしました。

それが、かれこれ3、4年前の話です。

芝居になるかどうかはひとまず置いて始めた取材だったので、「これ、芝居になるかなあ」と、いつも頭の片隅にはありましたが、「もしかしたらこのまま芝居にすることなく終わってしまう題材かもしれないなあ」などと、他人事のように思っていました。

それが大きく変わったのは、自分の癌体験です。

去年、私は胃癌を宣告され、手術を受けました。幸い、発見が早かったので大事には至らず、今なお元気に日々を送っていますが、この「我が癌騒動」に一応の決着がついてひと段落した途端、「終末医療を題材に芝居をつくろう」、いつかははっきりと心に決めていました。たぶん私の中で「何か」が大きく変わったのです。

というわけで今回の『死に顔ピース』は、ニュースで取りあげられた家族の実話から生まれた芝居ではありますが、私の癌体験もスパイスとして加えられています。なので、実話にして、私の半自伝、そしてそれらを包み込んだ「死を見つめ直す」新たなる物語です。

「死」と「笑い」。この相反するような二つが、どこまで融合できるのか。そしてそれをどう芝居に結実させるのか。なんだか、これまでの作風とは大きく変わる気がしますし、なんだ、いつもの古城ワールドじゃないか、となるかもしれません。

もちろん芝居は一人ではつくれませんから、多彩な客演を迎えた俳優たちといったいどんなワールドをつくり出せるのか。私自身、それを楽しみにしながら、もうすぐ稽古初日を迎えます。

2011年8月16日

古城十忍の

お触れ書き



4 又聞きの思い出

演劇人ウディ・アレンに、
ついに真っ向勝負!!
わくわくドキドキ、武者震いが止まりません。

ウディ・アレンは映画の人です。『アニー・ホール』『マンハッタン』『ハンナとその姉妹』『インテリア』『私の中のもうひとりの私』……挙げればキリがないほど名作が何本もあります。実は昔から結構ファンです。

速射砲のように飛び交う皮肉たっぷりの会話がたまりません。しびれます。その上、皮肉と嫌味の応酬合戦の果てに、「人間って馬鹿だよなあ。馬鹿だけど、いとおしいよなあ」と、しみじみ思わせてくれるのですから同じ物書きとしては激しく嫉妬すら覚えます。

その映画人、ウディ・アレンが2003年、ついに演劇へとそのフィールドを広げました。あちらは映画の人、オイラは演劇の人。そう自分に言い聞かせて嫉妬心に蓋をしているうちはよかったのですが、演劇という同じ土俵に上がって来られたからには、もはや憧れの対象ではなく、れっきとした敵、ライバルです。

ウディ・アレンが最初に手掛けた芝居、『ライターズ・ブロック』はあっという間にチケット完売、辛口で知られるニューヨークの批評家たちの評価も上々でした。敵ながらあっぱれです。負けてたまるか、です。

とはいえ、残念ながら僕はまだアレンの舞台を観たことはありません。なので一昨年の暮れ、翻訳家の鈴木小百合さんから、「これ、読んでみてくれない?」と、『又聞きの思い出』の翻訳を渡されたとき、そりゃもう興味津々でした。

「アレンの演劇は、アレンの映画を、ただ舞台の上に移し替えただけなのか？」

この一点だけに関心があったと言って過言ではないのですが、いやいや、敵ながらあっぱれです。やはり、アレンはただ者ではありません。

読んでみて驚きました。映画で見せる速射砲のような会話の応酬は存分に生かされながら、映画とはまた別の、「演劇ならではの手法を存分に駆使した世界」が繰り広げられていたのです。

上演するしかあるまい。——読み終えた頃には、ほとんどそう決めています。今では演劇の人ともなったウディ・アレンの戯曲とがっぷり四つに組んで格闘することで、「演劇ならではの世界」を今一度、僕自身も見つめ直そう。そう思ったのです。

ですが、さすが世界に名だたるウディ・アレン。上演契約も一筋縄ではいきませんでした。エージェントの要求は実に細かく、驚くような内容も含まれていたのです。

例えば、「戯曲は一言一句、変更してはならない」（まあ、こういう人は日本にもいますから理解はできます）、「ウディ・アレンの文字はタイトルの75%以上の大きさでなければならない」（おかげでチラシのデザインを何度か修正しました）、「ウディ・アレンの名前はタイトルのすぐ上、またはすぐ下の行にすること」（これは困った挙げ句、無視しました）……。

ここまで面倒臭い手続きに骨を折ってでも、この戯曲としっかり向き合ってみたい。その思いのほうが強かったので、なんとかGOサインをもらえたときには、なんだか大きな仕事をひとつやり終えたような気になっていました。

もちろん、本当に骨が折れるのはこれからです。アレンの戯曲に木っ端微塵に打ちのめされるのか。それとも戯曲をきっちりと読み解いて新たな世界を見事、獲得できるのか。

今回は強力な布陣を整えました。

『貴婦人の帰還』以来、2度目の付き合いとなる萩原流行さん、『中也が愛した女』で長谷川泰子を演じきってくれた山田キヌヲさん、『誰も見たことのない場所』でいくつもの役を演じ分けてくれた西海真理さん、そして今回、初参加となる青年座の尾身美詞さん。

それに我がワンツーワークスからは、奥村洋治、関谷美香子、重藤良

紹の3人が加わり、これ以上ない強力なアンサンブルが期待できそうです。この7人のキャストは初顔合わせの組み合わせがほとんどで、さてさて、どんな火花散る競演を見せてもらえるのか、今からわくわくドキドキしています。

見てろよ、アレン、俺も男だ。——今はそんな心境です。(笑)

お陰様で好評をいただいているアフタートーク・セッションでは、そのアレンについて、この上演のきっかけをつくってくれた翻訳家の鈴木小百合さんと思う存分、語り合いたいと思います。

同時に、新聞記者気質が今なお旺盛な演出家としては、数々の著作で知られる評論家の芹沢俊介さんをお招きして、『又聞きの思い出』が辛辣な視線で浮かび上がらせる「家族」というものについて、いろいろとお話を伺います。もちろん、俳優同士のトークセッションもあります。

それぞれ1ステージのみの企画ではありますが、興味のあるトークセッションがあれば、ぜひぜひご参加ください。

『又聞きの思い出』は、「又聞き」であることに重要な鍵があります。本邦初演でお届けする演劇人ウディ・アレンの傑作。

ご来場、心よりお待ち申し上げます。

2011年3月9日

古城十忍の

お触れ書き



3 蠅の王

鍵となるのは、
おそらく「暴力」です。

再び劇団として始動して、3作目の公演になります。

再びの劇団は予想通り、楽しくもあり、厳しくもあり。まだまだ集団としては足下も覚束なく明日をも知れぬ状態ではありますが、皆様が足を運んでくださる限りは「十忍」の名の如く、苦しきことも耐え忍んで頑張ろうと自分に言い聞かせつつ、日々、稽古に明け暮れています。

新たなる劇団3作目は『蠅の王』。ウィリアム・ゴールディングの有名な小説の舞台化です。

舞台化といっても、大幅に置き換えをして翻案するので、事実上はほとんど新作です。大変です。自分で企画しておきながら、「なんでこれをやろうと思ったのだらう?」と首をひねりたくなります。(笑)

というのも小説『蠅の王』には子どもしか登場しないんです。それも小学生です。原作は10歳前後の子どもたちだけが無人島に漂着する話ですから。(笑)

土台、大人の俳優がやるには無理な設定です。いや、もしかしたら開き直って、「俺たち、子どもで一す」と大の大人たちが真剣に演じたら、それはそれで斬新で演劇的なかもしれませんが……かなり、ハードルは高そうです。

なので本作は、「子ども→大人」「無人島→オフィス」と置き換えて、いわば換骨奪胎した『蠅の王』になります。チラシにも設定の置き換えを簡単に書いていますが、この置き換えが功を奏することになるのか否か、それは観ていただくしかありませんが、つたない劇作家としては、換骨奪胎

することで鮮明に浮かび上がってくるものがある。そう信じているのですが……。

作品の鍵となるのは、おそらく「暴力」です。

人が複数集まれば、そこに上下関係が生まれ、権力が生まれ、今度はそれが原因となって暴力が生まれる。人間には本来、そういう闘争本能が潜んでいる。

『蠅の王』はそう読み解かれることが多いように思うのですが、皆さんはこの考え方に「なるほど、そういうもんだ」と思えますか？

もちろん、そういう部分もあるだろうと僕も思うのですが、底意地の悪い演出家としては、「上下関係がなくても、権力が介在しなくても、暴力は生まれるのではないか？ だから人間は厄介なのではないか？」とも考えるのです。

つまり、「理由なき暴力」です。

果たして、人間には「理由なき暴力」は潜んでいるものなのか——？ 潜んでいるとしたら、それはなぜなのか——？ 何が「理由なき暴力」を引き起こすのか——？

どこまで描けるかはわかりませんが、換骨奪胎『蠅の王』では、なんとかしてもそこに迫りたい。迫って、「理由なき暴力」の正体を解き明かしたい。そう考えています。

上演は1月7日から12日まで。年明け早々、まだまだせわしない頃だと思いますが、僕らは年の瀬も正月も返上して稽古に取り組むこととなります。だから見に来てくださいねとお願いするのは大いに筋違いですが、この「俺らにゃ正月もないのかよ？」という、いささかトホホな気分でつくりあげる新作をどうぞ分かち合ってくださいれば嬉しいです。(と、結局お願いしています)。

ご来場、心よりお待ちしております。

2010年11月3日

古城十忍の

お触れ書き



次世代を担う演劇人育成公演 眠れる森の死体

少年たちの

「気分」を視覚化する。

『眠れる森の死体』の戯曲を僕が書いた1995年は、思えばとんでもない年でした。

年の初めに阪神淡路大震災が神戸の街を火の海にし、春先には地下鉄サリン事件が社会を騒然とさせ、ついにオウム真理教の朝原彰晃が逮捕されます。また、金融機関の経営破綻も相次ぎ、景気は低迷する一方で、まったく先行き不透明……。

まさに、日本中を揺るがす出来事が立て続けに起こり、「日本は決して安心できる国じゃないんだな」と、言いようのない不安感に国全体が覆い尽くされてしまったような記憶があります。

その前の年には、「葬送の自由」「終末医療」「不妊治療」といった社会問題をテーマとして芝居を書いていましたが、『眠れる森の死体』ではテーマに迫るのではなく、ある種の「気分・価値観」に迫ってみたい、そう思って取り組み始めました。

言ってみればその当時、国全体に漂っていた「言いようのない不安感」とはどういうものなのか、その正体をなんとしても自分自身で実感したい。そういう思いとも、もしかしたらどこかで結びついていたのかもしれない。

もちろん執筆の動機には、「少年犯罪の増加」「少年法の改正」といったテーマがあったわけですが、そういったテーマをあれこれひねくり回すより、「今どきの若者の気分・価値観とはどういうものなのか」、それをそのまま視覚化し、舞台に乗せてみたいと思ったのです。

もし、それがうまくいったとして、できあがった舞台から客席に押し寄せてくるのは、切ない叙情的な懐かしさなのか、それとも激しく荒々しい感情なのか、そのどちらでもないのか。自分で言うのも妙な話ですが、それをこの目で見て確かめたい。そう強く思っていました。

これが15年前に『眠れる森の死体』を書いた偽らざる理由です。

15年前に感じた「今どきの若者の気分・価値観」が2010年の今なお「今どき」なのかどうかは、かなり怪しいかもしれません。

ですが同時に、バブル崩壊後の1995年と平成不況からなかなか脱却できない2010年、時代は違っている、自分を持て余し、先行き不透明な不安を抱えた高校生の心情は今も昔もそう大差はない。そうも思います。

だからこそ今、長い空白期間をおいて再びこの戯曲に取り組むと、さてさて、どんな舞台が立ち上がってくるのやら。それをどうしても見届けたい。その思いが高じて今回の再演となりました。

10代を演じる俳優は、越智哲也、安田惣一、日暮一成の劇団若手メンバーに、吉田紗和子を客演に迎えます。

脇を固めて「大人の価値観」を演じるのは、奥村洋治、関谷美香子、重藤良紹のベテラン勢で、初演と同じ役を演じるのは奥村だけという、まったく新しい顔合わせです。

劇場空間も初演よりはずっとコンパクトで密閉感も強く、もしかしたら息づかいから心音まで客席に届きそうな臨場感を生み出せるかもしれません。

初演の青山円形劇場ではたった5日間の公演だったにもかかわらず、ホラーがかったムードやリアルに飾り込んだ美術が受けたのか、ロコミで尻上がりに当日券が伸びていき、千秋楽では入りきれず、やむなく結構な数のお客様に帰っていただいたのをよく覚えています。

今回もそれほどに皆様に愛される舞台になればいいのですが。

ご来場、お待ちしております。

2010年5月17日

古城十忍の

お触れ書き



1 死ぬのは私ではない

死刑囚を

主人公に「罪と罰」を考える。

ずいぶん昔、新聞記者を職業としていた頃、刑務所に入ったことがあります。ぱくられたわけじゃないです。記者研修での見学です。

案内されて恐る恐る中に入り、まずは独居房を見学。

服役囚は日課の作業に出ていて誰もいませんでしたが、きちんと畳まれた薄い布団、ささやかな書棚に並んだ聖書が妙に印象に残りました。

次に服役囚たちが働いている作業場へ入ろうとすると、刑務官から「絶対に目を合わせないでください」と釘を差され、思わず「どうしてですか?」と聞き返すと、「じろじろ見られることに彼らは慣れてないので」という返事。

ふーん、そういうもんかと思いつつドアを開けて入ると、服役囚たちが一斉にじろじろとこちらを見ます。作業を続けながらも、ガン見です。

うわあ、こええ……。

突き刺すような視線を全身に浴びつつ、その部屋を通り抜けるあいだ、こっちのほうが何か悪いことをして晒し者になった気分になり、どっと疲れました。

2階の廊下の窓から見えた、直線的に細かく区切られた中庭は運動スペースになっているらしく、背中いっぱい彫り物をした男たちが束の間の自由を噛みしめるように逞しい筋肉を思い思いに動かして、昇り龍だの般若だの、たくさん色鮮やかな彫り物が躍動していました。

あれから20年以上が過ぎた今、あのとき僕が見た服役囚たちはどうしているのだろう。

ときどき、そんなことを考えます。無事に務めあげて社会に戻った人、
今もあの独居房で規則正しい毎日を過ごしている人。社会に戻ることも
なく、いつしか亡くなった人……。

刑務所見学をしながら、妙な話ですが、なぜか「国家」というものを考
えていたことを覚えています。日本は法治国家である。法を破ったから、
彼らはあの場所にいる。あの場所であいう日比を過ごしている。そうい
う仕組みを持っているのが日本という「国家」のひとつの姿なのだ、と。

日本は先進国でも数少ない「死刑制度」を堅持し続けている国で
す。たびたび通り魔的な凶悪犯罪が起こるせいか、世論でも死刑制度
を支持する声は5割を超えています。

自分の中にも「死刑制度やむなし」という思いがないわけじゃありませ
んが、裁判員裁判が始まった今、日本国民である以上、いつ「死刑を決
定する立場」に立たされないとも限りません。それは理屈ではわかるので
すが、どうも感情が伴いません。いざ自分がその任務を負わされたら、ど
んな思いにとらわれ、どんな感情が湧き起こるのだろう……？

僕がかつて見た多くの服役囚は、もちろん死刑囚ではありませんでし
たが、久々の新作では想像力を駆使し、死刑囚を主人公にして「罪と
罰」について考えてみようと思います。

あ、もちろん芝居ですから、それなりにエンターテインメントする気は満
々ですので、堅苦しく構えることなく、気楽な気持ちでお越しく下さい。

死刑執行に携わった元刑務官を取材した経験をお持ちの新聞記者・
片山夏子さんほかゲストとのアフター・トークセッションもあります(奥村・
関谷・重藤の3人だけの回は、果たしてちゃんとしたトークになるのか?と
いう不安が今から満載ですが)。

ともかくも旗揚げ公演、新たなる始まりです。ぜひ見届けてやってくだ
さいませ。

2010年2月3日

古城十忍の

お触れ書き



0 ワンツーワークス始動

なんでまた

新しい劇団を始めたのか？

「これからの演劇はますますプロデュース公演にシフトしていく。劇団は衰退の一途だね。たぶん、その流れは変えられないね」と、まことしやかに囁かれる声が日に日に大きくなっている演劇界。

ならば、「敢えてやってやろうじゃないの」と立ち上げました、新たな劇団、「ワンツーワークス」。

「主力俳優もコンセプトも一跡二跳の流れを引き継いでるんだから、劇団名は一(跡)二(跳)の作品群ってことでワンツーワークスでいいんじゃない？」

ネーミングは恐ろしく安易ですが、心意気は生半可な気持ちじゃございません。敢えてやってやろうじゃないの、という勢いの裏には、それなりに理由もありまして。でなきゃ、劇団なんて骨の折れることにまたしても足を踏み入れようなんて思いませぬ。

一跡二跳解散後、プロデュース公演で何作か作品づくりに取り組んでみたものの、その居心地の悪さをなんと言えいいんでしょう……。決して悪い側面ばかりじゃなかったのですが(むしろ劇団の持つ人間関係の煩わしさからの解放感もあったし)、されど、人の褌で相撲を取らされているような、「抛りどころのない感覚」とでも言いましょうか。

たぶん、「母体があつてこそ、プロデュース公演も生きる」ということを思い知ったんですね。

偉そうに言えば、自分自身が社会と向き合い、人と向き合い、その中で怒りを覚え、衝撃を受け、心震え、そんないろんな思いをひとつひとつ、

きちんと芝居という形にしていく。そのスタンスを持っていないとアカンわ。
——そういうことだと思います。

それは俳優に対しても同じで、共通の基礎訓練を習得している俳優同士だからこそ「可能な表現」というものは必ずあって、ともすれば舞台の交通整理だけをして、演出をしているような虚しさに陥ってしまう危険のあるプロデュース公演だけじゃ、どうしても物足りない。翻訳劇をやるにしても、自らの基準に照らして戯曲を選ぶ。コンセプトを導き出す。今さらながら、当たり前のことを改めて噛みしめさせていただきました。

そんなこんなで、「初心に帰ろう」「原点回帰」と相成りました。時代の流れには沿わないのかもしれないけれど、敢えて「劇団」を母体として持とう。これが今の結論です。

もちろん、プロデュース公演の面白さをすべて捨てる気はなく、この「怒り」は母体の劇団で創作したほうがいいな、この「衝撃」はいろんな俳優のパワーをぶつけ合ったほうが面白い舞台になるな、と、そんなスタンスで今後は臨めたらなと考えてる次第です。

先行きはわかりませんが、やれることを必死こいてやってみます。

「ワンツークス」。どうぞ、お見知りおきを。どうか、末長くお付き合いください。

2010年1月30日